

精一杯の愛でした。

最愛の妻にラブレターを書くため文字の勉強に奮闘する夫と彼を長年支え続けた妻の人生をつづったドラマ



割引券：このチラシご持参の方は、大人一人 1100 円で 5 名様までご利用できます。

2007

結婚35年

1972

出会い

寄り添い、支え合って生きてきた35年。
最愛の妻へこれまでの感謝を込めて、この「ラブレター」を贈る――

「君は、僕と結婚して、幸せでしたか？」

Story

西畑保、65歳。文字の読み書きができない。そんな彼の側にはいつも最愛の妻・餃子がいた。

保は貧しい家に生まれ、ほとんど学校へ通えず大人になった。生きづらい日々を過ごしてきたが、餃子と運命的に出会い、めでたく結婚。しかし、その手放したくない幸せ故に保は読み書きができないことを言い出せずにいた。半年後、ついにひた隠しにしていた秘密が露見し別れを覚悟する保だったが、餃子は保の手をとりながらこう告げた。

「今日から私があなたの手になる」

その言葉に、その眼差しに、保は救われた。

どんな時も寄り添い支えてくれた餃子へ感謝のラブレターを書きたい。定年退職を機に保は一大決心し夜間中学に通い始める。担任の谷山恵先生のじっくりと粘り強い教えや年齢・国籍も異なる同級生たちと共に学ぶ日々で少しずつ文字を覚えていく保。だが老齢のため物覚えも悪く、気付けば5年以上の月日が経過した頃、一字また一字と書いては消しまた書くひたむきな保と、それを見るときもなく見守る餃子は結婚35年目を迎えていた。

変わらない日常がいつまでも続くと思っていた。なかなか書き上げられずにいたラブレターがようやく形になろうとしていた頃、餃子が病魔におかされて……。